2023年7月23日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

差し向かう存在

［創世記2章18節～25節］

主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。

「ついに、これこそ わたしの骨の骨
わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう
まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」

こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。

[1] 愛の対象である「助け手」を

「創世記」の2章を続けて読んでいます。今日の所ではまだエバという名前は記されていませんけれども、初めての女性（の人間）が誕生した時のことが書かれています。彼らは「エデンの園」の中にいます。そしてまだ、蛇に誘惑されて神の言葉に背く、という所までは行っていません。初めに創造された人間たちの幸せな時間と空間がそこにあります。来週は3章に入り、罪の中に陥ってしまう人間の姿を見ることになりますが、今日の所はまだ深刻になる前、と言うことが出来ます。

人間が一人ではなく、二人いる。そこにはもう「社会」というものが生まれますね。そして二人の人間がそこに存在すると、そこに「上下関係」というものが生まれます。「支配-被支配」の関係と言ってもいいでしょう。なかなか私たちはそういうようなものから自由になれない性質を持っていると思います。「いいえ、私たちは愛し合っているからそんな心配はありません、大丈夫です」と仰るでしょうか。それは素晴らしいことです。しかし、なかなか人間とは楽観視出来ない、厄介な者であることも私たちは感じていることもあるのではないでしょうか。

私は今回ここを読んでいて、神様が初めの人間からもう一人の人間・他者をお造りになったということは一体どういうことなのだろうと改めて考えさせられました。単に性（セクシャリティー）が異なる存在を造られたということではないと思います。単に性の問題だけであれば、ひょっとすると女性は男性にとって「都合の良い存在」となってしまうかもしれません。それは性において男が女の人を支配するということにもなってしまいますし、精神的な差別にも繋がってしまうということがあると思います。創世記2:18で「彼に合う助ける者」という表現は、以前の口語訳では「彼に相応しい助け手」となっていました。この「ふさわしい」という言葉は、ちょっと、彼の方に合わせるといった価値観が感じられますよね。

人間というのは、人間の「奴隷」になってはいけないのです。神様はあの出エジプト記で何をなさったかと言えば、「奴隷状態」からの解放です。主なる私があなたを当時のエジプトの奴隷の家から導き出したのだと。使徒パウロも言いました。「自由を得させるためにキリストは私たちを自由の身にしてくださったのです。奴隷のくびきに二度とつながれてはなりません」（ガラテヤ5:1）と。私たちは案外何かに‟隷属”してしまうということを良しとしてしまうことがあると思います。権力的なものにも「長いものに巻かれる」ということが起こるし、もっと身近で言えば「家の中の権力」です。「ウチは妻が強い」なんて、笑って言っている内はいいのかもしれませんけれども、よくよく考えてみると、「強い」「弱い」という価値観で夫婦関係をやっていくっていうのはやっぱりどこか変ではないでしょうかね。まあ、これまで男社会で回ってきたツケがやってきた、ということも出来るかもしれませんが、もし本当に、お互いの意見も言えないほどにどちらかが押さえつけられているとしたら、それこそ「奴隷の家」になってしまうと思うし、もしお子さんが居たら、その子は知らないうちにその空気を吸い込んで深く傷ついてしまうのではないでしょうか。

聖書は、初めの男と女の間にはそんな「強い」・「弱い」、「支配-被支配」というものは存在していないということを言っていると思います。神様は、女の人を、男を眠らせる中から創造されました。つまり、男が知らないうちの出来事、男の努力とか手に全くよらない出来事なんです。初めは神様は、アダムを眠らせる前は、彼に合う存在として、彼と同じ土から創造した動物や鳥を「助ける者」にどうだろうと思われたようですね。アダムは彼らに名を付けましたが、「助ける者」にはなり得ませんでした。聖書は他の箇所では「助ける者」というのはどこまでも神様ご自身です。しかし、ここでは神様は「人が独りでいるのは良くない」と、ご自分の他に、人間を助ける存在を用意されようとしたのですね。私はここに神様の優しさがあると思います。私が思うに、究極的には、人間はただ神様がいらっしゃればその神様との関わりで生きて行けると思うのです。ですから結婚するということが絶対条件ということではありませんけれども、神様は人間の弱さも知り尽くされていると思うのです。それで神様は、神様だけではなく、ご自身に替わる訳ではないけれども、聖書にも「御使い」という存在が出てくるように、人間にパートナー（同伴者）を与えようと思って下さったのではないかと思います。しかも、神様は、彼の一部（骨）を用いられて、この人のパートナーである他者（女）を造られたのです。

神学者ボンヘッファーは大変深いことを語っていると思ったのですが、アダムは自分の限界をよく心得ていたと言うのです。私はどこまでも被造物だと。どこまでも、命の木と善悪の知識の木が植わっている園の中で生きること、つまり神様の掟の中で生きることに不自由を感じない者としてそこに生きていた。そして神様は、やはりアダムと同じように被造物としての限界を持ちながらも、彼が愛する対象である助け手を彼の傍らに造ろうとされたのだと言うのです。「愛」に生きるために。アダムは、眠りから覚め、このエバ（3:20、「命」の意味）の創造を、神様の賜物という光の中で受け止めます。そしてボンヘッファーはこう言っています。「エバが彼から生まれたということは、彼にとって誇りの動機ではなく、むしろ特種な感謝の動機となる」と。自分が威張るための女の創造ではない、神様への感謝、この他者への感謝が起こるための創造だったのだと。確かに彼は神を賛美し、この他者への愛を歌っています。―「ついにこれこそ、わたしの骨の骨、わたしの肉の肉。これこそ女（イシャー）と呼ぼう」（2:23）と。

[2] 隣人を、自分のように愛すること

そうです。創世記によるとこの最初の他者は、この初めの人間の「分身」のように造られたということです。無から有をお造りになれる方が、敢えて、彼の存在の一部（しかも彼のハートに一番近い骨）を用いられたのです。2:24に「（彼らは）一体となる」とあり、ここで結婚の神秘と尊さが言われる訳ですけれども、私は「助ける者」という意味が、お互いはお互いの一部なんだ、と言われているのではないかと思えてなりません。いわゆる「ヘルパー」ではないのです。

カール・バルトという神学者は、男と女は、「差し向かう存在」としてここで造られたと言います。上下関係でもどちらかが支配しているのではありません。差し向かう。対面している。これは互いを無視しないということでもあるし、相手を私の鏡にする、ということだと思います。えっ？と思われますか？でも、これは神様の深い憐み、深い知恵だと思います。「ついにこれこそ、わたしの骨の骨、わたしの肉の肉」 とアダムは喜びの声を上げましたよね。女は、彼の一部から造られた彼の分身と言っても良い。そして女も、彼の中に、自分自身の神秘を発見するということが出来るのではないでしょうか。その意味で、主にあっては男も女もないのです。

初めにも言いましたが、人は、二人の人間がいればそこに社会が生まれます。傷つき、傷つけ合う愚かさがいつもあります。私自身も差別とは無縁だなんてとても言えません。ここで時間を使い、偉そうに語っていること自体、権力的になってしまっているのかもしれません。神様の名による権力ほど醜く、あってはならぬものはありません。そこで神様は、人が人であることをちゃんとわきまえるために「他者」を私たちに与えて下さったのだと思います。教会の人間関係もそうでしょうけれども、一番根本的な単位は、夫婦でしょう。親子でしょう。兄弟でしょう。その相手を、神様が私に与えてくれた存在として見る。その相手と差し向かう中で、己の内側にも神様は語って下さるに違いありません。私たちは、キリストの大きな赦しの中に既に生かされています。ですから聖書は語っています。―「隣人を自分のように愛しなさい」。―相手を愛することは自分を愛すること、逆に、相手を蔑むことは自分を蔑むことではないでしょうか。神様の憐みは、私たちの身近なところに満ちていると思います。私たち、どのような中でも、神様からの息吹を頂き、具体的な人と人との関わりの中で神様とイエス様の恵みの確かさを見させて頂きたいと思います。お祈り致します。

奴隷のくびき、罪のくびきから解放して下さった主よ、人間の尊厳、自分自身の尊さを創世記からこの朝、改めて教えて頂きました。神様と向き合うことも、他者と差し向かい合うこともいつしかスルーしてしまい、孤独に陥ってしまう私たちです。どうか、あなたに向き直すこと、またあなたが、私たちに合う助ける者をすぐ近くに与えていて下さっていることに目を開かせてください。また、私たち自身が、主に愛され、捉えられた者として、感謝の中に歩ませて下さい。主イエス・キリストの御名前によって祈ります。アーメン。